

# なのはな通信

第5号 2000.12



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 0471-58-9955 FAX 0471-59-7055

発行責任者 小澤 満子



第6回東葛祭の一コマ

## 人間の輝く二十一世紀へ

学校長 三上 満

まもなく二〇〇〇年も終り、新しい二十一世紀に入ろうとしています。二〇世紀ほど、人類の歴史のなかで大きな変化が生れた世紀はありません。年表を見ると、とくに前半ほどのページにも、侵略、戦争、動乱、弾圧、虐殺などという言葉がおどっています。二〇世紀はたしかに、絶えまない戦争、殺りくの行われた世紀でした。

しかし同時に、侵略や専制支配や搾取に対して、人々が人間らしく生きることを求めてたたかいつつ続てきた世紀でもありました。だからこそ、弾圧や虐殺の文字も年表に刻まれているのです。そして第二次大戦終結をさかいにして世界は大きく変わりました。かつてはそれを主張することさえ命がけだった、民主主義、民族独立、基本的人権といったことが、もはや誰も反対することができない『人類の大義』になったのです。

この大きな変化は、今年行われたシドニーオリンピックを見るだけで明らかでしょう。

一八九六年アテネで行われた第一回オリンピックの参加国は、十三ヶ国でした。独立国と言えるのがそれくらいしかなかったのです。

1科三年生、2科二年生の皆さんは、それぞれ訪ねた沖縄、韓国、いづれの地でも、二〇世紀の歴史が深く刻まれていることを見ることのできたでしょう。『ひめゆり』の生存者、高城喜久子さんのお話の中にも、ナヌムの家で「またおいでね」と言ってくれた元日本軍慰安婦のハルモニたちの言葉の中にも、それを見ることのできたでしょう。

歴史を動かしてきたのは、おおぜいの名もない民衆です。私たちは決して、時の流れになすがままに流されていく『客体』ではありません。幸せを求める心をつなぎ合って、歴史を創造する『主体』なのです。

医療や看護は、もともと健康に幸せに生きたいという人びとの願いを助けるための行為です。ならば人権と平和こそ医療の土台であることは言うまでもありません。二〇世紀の歴史の上に立って、人間がいつそう輝く二十一世紀へ向って、みんな歩いていこうではありませんか。

# 第3期学生 自治会総会

2000.11.17

学生自治会も、三期目に入りました。学生が主人公であるという学校づくりも少しずつ根づいてきていると思います。学生ひとりひとりの要求を実現するために、議論を重ねて実現した事が、喫煙所を設けた事、お弁当販売を始めた事などです。みなさんの感想はいかがでしょうか？みなさんの生の声を聞かせて下さい。

よりよい充実した学校生活をおくるためにも、東葛看護学生の得意とするグループワークを生かして、みなさんと意見交換をしていきたいと思います。

時として、要求実現のために先輩方のような県庁交渉をしたりすることがあるかもしれません。また、教職員への要望等をまとめて提出していきたいと思えます。そしてこれからも、学校行事など実行委員と協力して、成功に向けて取り組んでいきたいと思えます。みなさんが参加し楽しめる学校行事、又、サークル活動なども、もつともつと活発にしていきたいです。

この学校は、年令も人生経験もそれぞれ違う人達が集っていますので、いろいろな意見があると思います。様々な沢山の意見が聞けたら幸いです。学



生のみなさんが、自治会を身近なものに感じてもらえるように、一緒に考え行動していきたいと思えますので、新役員一同よろしくお願います。自治会活動を通して私たち役員も成長していきたいです。

(自治会会長  
安藤 友美)

## 第3期自治会役員

会長	安藤 友美	(1科1年)
副会長	刀棚 真弓	(1科1年)
書記	小柳 史江	(1科1年)
	楠田 さやか	(1科1年)
	立花 佳子	(2科1年)
	三枝 未幸	(1科1年)
	加邊 伸子	(1科2年)
庶務	高橋 奈津子	(1科2年)
	渡邊 俊介	(1科1年)
	梅蔭 光	(1科1年)
	中村 ますみ	(1科1年)
	加藤 学実	(1科2年)
	清水 宣之	(1科3年)
会計監査	前田 梨絵	(2科2年)

## 原水爆禁止 二〇〇〇年 世界大会に参加して

職員一名と学生五名で、二〇〇〇年八月四日〜六日、原水爆禁止世界大会に参加しました。今回は広島で行われ、約七〇〇〇人の人々が世界中から結集しました。

日本は唯一の原爆投下による被爆国です。被爆した方々のお話は、何度聞いても胸が痛むものでした。また核による被爆者は、日本人だけではないという事もこの大会に参加した事で深く知る事ができました。今も核保有国がある限り、地球上で核実験が行われています。核実験は、発展途上国や、その付近に暮らす人々には何も知らされずに、行われているのが現状です。そして、気づかないうちに放射能を及び病氣(主に癌、白血病)を抱え苦しんでいる人々が世界中に沢山居る事を知りました。



戦争、核兵器は絶対必要のないものだと言いきれます。人が人を殺すという行為が、あたり前になってしまいう事は絶対あってはいけない事だし、国や宗教が違っても人の命の大切さは、変わりないと思います。今の日本は、戦争を準備するかのよう新ガイドライ

ン法が通ったり、国家国旗法で日の丸君が代が正式なものとなったりしています。

原水禁大会に参加をして、世界中に多くの被爆者の方が居て現在も苦しんでいる事などの現実を知りショックを受ける事も多々ありましたが、被爆者の方やその運動を支援する方達に出会い、私達も何かしなくてはいけないと思いました。そして、私達にとつて戦争や核というものが身近で重大な問題として捉えられるようにもなりました。決して他人事ではなく、目を背けてはいけません。歴史を学ぶという事は、二度と同じ過ちを繰り返さないという事でもあります。身の周りで何が起きているか今の政治の動きを知り、間違いを見ぬける力を身につけるためにもしっかりと学習をしていかなければという思いです。世界が平和になるには、私達一人一人の力が大きなきっかけとして私達は色々な場へ足を運び、視野を広げ学習を深めています。視野を広げるとい事は患者さんと接する上でもとても大切だという事を実習でも学びました。これからも、看護学生である前に一人の人間として、もつと沢山の事を学んでいきたいです。

(世界大会参加者一同)

# 第6回 東葛祭

2000.9.30

～ 10.1

九月三十日、十月一日の両日、第六回目となった勤医会東葛看護学校の東葛祭が開催されました。今年のテーマは二〇〇〇年ミレニアムということもあり「未来のナース祭りだワッショイ〜ミレニアムフェスティバル」となり学年を越えて交流し、地域の人も楽しめる東葛祭にしよう

と準備を進めてきました。初日は、学生の日頃の学びを各クラスごとに発表する日。一年生の『全身清拭』という何ともかわいいたマから三年生の『動脈硬化』という難しいものまで、それぞれクラス一丸となつて取り組み、普段出来ない学びの交流の場となりました。その日の午後は中央合唱団の人と三上満先生が作詞し



た「子どもここにある希望」の合唱と、金八先生でおなじみのロックソーランを踊りました。ロックソーランはとても激しい踊りで、日々筋肉痛との闘いの中、本番では、躍動感あふれる演技ができ、アンコールの嵐で、多いに盛り上がりました。

二日目は、毎年好評の歌う手話コーナーや指圧など企画もりたくさん

の一日。患者さんが来ても食べられるものをつくろうと和食中心に工夫した食堂、いいものは早く手に入れよう!!と学生、教職員が紙袋をかかえしきりに値切っていたフリーマーケット、沖縄戦や南京大虐殺などを展示した平和ゼミのコーナー、学生が地域フィールドで訪問した患者さんの絵の展示など内容も色とりどりでした。中でも例年泣き出してしまいう子ども続出の「おばけ屋敷」では、なんと学生も泣きりタイヤしてしまふほどの怖さで、脅かす側も少しやりすぎたかと反省する場面もありました。歌う手話コーナーでは、毎回満員で立ち見も出るほどの大盛況ぶり。福山雅治やモーニング娘の曲を手話で歌いました。指圧のコーナーでは、三上満夫妻そろってマッサージ、「学生にもんでもらうなんて最高だ!!」と満面の笑みの満校長でした。今年の東葛祭参加者はなんと去年よりはるかに多い五百名、地域に出てハンドマイクやびら配りなど宣伝したかいがあり大成功となりました。

後夜祭では、一日目好評だったロックソーランやいくつかの有志がで

てブーイング娘や男二人のギターの弾き語り、全員でのダンスなど歓声と大きな拍手で盛り上がったものとなりました。

(第6回東葛祭実行委員長

畔上 純子)



## キャッピング セレモニー

—決意表明—

一、何もなかった

私達は受験という大きな壁を乗り越えて、憧れの看護士になる夢を叶えるために、希望に満ちた第一歩を踏み出した。知らない人達の中で友達を作れるのか、新しく始まる授業についていけるのかどうか不安な気持ちもあったが、全てに対してやる気マンマンだった。授業が始まり、初めて開く教科書がすごく嬉しかった。しかし、読み方すらわからない専門用語が並び、教科書まるごと一冊の試験範囲に驚いた。これでは高校までのように、与えられたものをこなすだけでは、追いついていけない気がした。また、授業を理解しきれないまま、次から次へと授業が進んで、わからなないことがどんどん増えて、焦りを感じた。最初は、この学校に入っただけで看護士にすんなりなれると思っていたが、そう甘くはなかった。(そう簡単ではなかった。)

二、知識や技術を学んで

白衣を初めて着た時、あんまり深く考えず着れることが嬉しくはずかしかった。しかし、はや五月、学校生活にも慣れがでてきて、入学時に抱えてい

た緊張感がなくなり、授業で寝てしまいう事が多くなった。学内実習、勉強、レポート、グループワークなどやることが増え、まわりから聞いていた以上に大変になった。学内実習は、白衣に着替えることにめんどくささを感じている自分に、仲間が声をかけてくれた。声をかけられなかったら気づかない自分は看護士になれるのだろうか?!という不安が募りはじめた。それと同時に覚えることが無限にある中で興味ある授業はおもしろく感じ、専門職の勉強を学ぶことにやりがいを感じ、楽しくなっている自分がいた。学内実習では、清潔を保つ技術を習い、患者さんになりきっての排泄実験なども行った。技術を習得できることが嬉しく、指圧、血圧測定などを家族に試した。自ら技術を体験していく中で、少しずつ、患者さんのことがわかるようになってきた。この気持ちのまま十月三十日(十一月二日に初めて患者さんを受け持つ基礎II実習へ向かった。)

三、卵になりかけ(基礎II実習を通して)

知識不足で教科書通りの方法しか頭になく、患者さん一人一人に合った看護ができなかった。今回初めてペアで一人の患者さんを担当し、私達が学内で習った技術を患者さんに促すと拒絶された。患者さんに喜んでもらおうとして行った保清技術が患者さんに不慣れな顔をされることになり、これでよかったのか、どうすればよかったのかと自己嫌悪に陥った。患者さんのその日

の変化や症状によって、その日の看護計画を変更することの重要性を知った。

患者さんは一人の人間であり、一人一人違う個性を持ち、社会の中で悲しみや痛み、苦悩を抱きながら、明日への希望を持って生きているということを知り、患者さんを一人の人間として見られるようになった。「患者」を捉える上で「患者とは何か」をグループで話し合い、そして人間対人間で接していくことの難しさに気がついた。本当に看護士になるのか、なつてもいいのかという不安が募った。

初めて患者さんを受け持っているという嬉しさと共に患者さんの命を預っている責任の重さを実感した。すごく不安だったし、恐ろしくも思えた。それでも、患者さんの「いい看護士になってね」という励ましの言葉。看護婦の注意の裏の優しさ。先生の応援。友人と悩み話し合う中でお互いの支えになつていることを感じて頑張ろうと思つた。患者さんの生きようという気力に感動し、患者さんの側について触れ合い、一緒に頑張っていけることに看護士としての喜びや楽しさやすばらしさがあるということを発見した。患者さんと一緒に頑張ることは大変、たとは思いますが看護士になりたいという意欲が強まった。

四、仲間と先生に支えられて

先生 先生方は、私達が本当に理解できるまで熱心に物事を教えてくれる。困つた時には、いつでも、わかりやす



いアドバイスや考えるための場を与えてくれた。また、さりげない言葉でそっと背中を押してくれて、一歩踏み出すための勇気をくれた。先生方は、私達一人一人を見てくれている。

仲間 実習はとても辛かったけれど、ペアや仲間と助け合ったからこそ頑張った。一人一人の知識はまだ少ないけれど、グループで考えることにより自分では気づくことのできなかつた、新たな発見が生まれた。

自分のことをしっかりと注意してくれる仲間がいる。間違っていることは指摘し合い、困った時は相談にのってくれる、同じ目標を持った仲間はいざという時、心の支えになる。仲間同士励まし合うことで、頑張ることができ、何事からも逃げない、投げ出さないとすることが身につけてきた。

#### 五、看護士（目標）

日々の積み重ねである授業を意欲的に聞き、寝ている人などがいたらみんな声をかけ合い、クラス全体で協力し、楽しく学べるような環境を作っていく。私達は、知識や技術を増やし、患者さんに接していく上で自分達の足りない面に気づき、支え合い成長しながら、患者さん本人、家族の願いを捉える為に患者さんの気持ちまで理解できる。広い視野を持った看護士になる。そして、これから、自分の看護観を見つければ、四十人全員で国家試験に合格し、初心を忘れずに、この学校を巣立っていきたい。

### 看護2科1年生 (6期生)

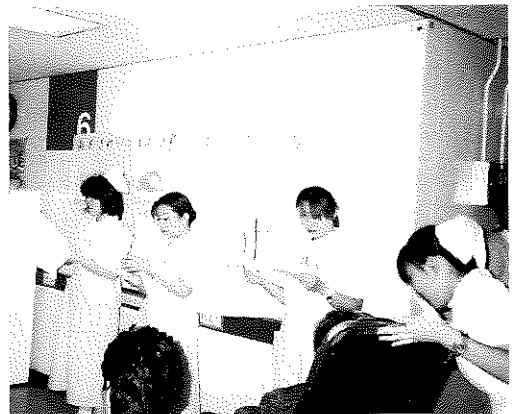
## 基礎臨地 実習の学び

去る六月十六日から十一月十日にかけて基礎臨地実習が東葛病院、二和病院にて行われました。

実習目標は「患者に密着し事実の観察や訴えを正確にとらえ、医療要求実現の可能性を見い出す」「患者の事実の背景を深めるため生活史、病態を科学する」等です。

実習病院のオリエンテーションを受け、東葛・二和両病院が地域の方々からの要求をもとに建設された病院であり、地域に果たす役割について知ることができました。また、一人の患者さんに、多くの医療スタッフが関わっている事も知りました。

まず、病院を退院された患者さんの自宅を訪問する「退院フォロー」を行いました。病衣を着ていない普段着の患者さんからお話を聞くことで、患者さんの生活実態に触れ、学生は「病気を抱えながらも、その人らしく自宅で生活している」ことを感じました。また入院中には聞けなかった、病院への要望を聞くことができました。病棟と地域での医療について考える機会となりました。



病棟実習では、まずはカルテを読まずに患者さんの元へ行き、ありのままの患者さんを知ろうとしました。「何の情報もないまま患者さんの事を知れる訳がない」と最初は四苦八苦する学生もいましたが、患者さんに密着することで少しずつ患者さんが何を思い、願っているのか捉えていけるようになりました。

事例を紹介します。Aさんは五十二歳の男性で、心筋梗塞で入院してきました。当初「病気は医者任せにしている」と話されていましたが、学生が密着することで「病気について知りたい、家族のためにも社会復帰しなくては」と考えている事が分かりました。そこで学生は、生命活動で学んだ心臓の解剖生理からAさんと話し、共に心筋梗塞について学ぶ事で、Aさんを応援して

いくことにしました。学生と共に疾患について学んでいくことでAさんに広がりが出始め、学生の話をもっと取ってくれたり、血圧や体重を自己測定し変化を知らせてくれるようになりました。分らないところは、学生に次々質問してくれるようになり、学生は答えに苦労しながらも、日に日に治療に主体的になっていくAさんを身近に見て、実習の励みとしていきました。患者さんから学ぶ、ということを実感しました。

十年以上の臨床経験をもつある学生は、一人の患者さんに時間をかけて密着したことで、患者さん各々に生活史があることを再認識し、生活史と疾患は深く関わっていることを学びました。そして、忘れかけていた環境整備の大切さや、あやふやにしていた看護技術の正確な知識を学び直すことができませんでした。「忙しくても、どんなに小さな訴えでも患者さんの訴えに耳を傾け対応する事が、医療要求の実現になると考えた」と言います。

実習最終週に行った啓蒙活動では、普段使っている医療用語を患者さんに伝わるように話すことの大切さや難しさを実感しました。パンフレットを作成し患者さんに「これがあると何度でも読めて質問できる」と言われやっつけ良かったと思えました。

ここでの各々の学びは、年明けの発表会で共有していきます。

(2科1年担任 机 みどり)



# 日本国憲法と平和と医療

## 1科4期生

### 沖縄研修旅行を終えて

私達は、九月十日から五日間研修旅行で沖縄に行ってきた。事前学習として沖縄の歴史や文化、沖縄戦やひめゆり部隊、基地について勉強をし研修旅行に臨んだ。

その中で印象に残ったものは、たくさんあると思うが、ひめゆり部隊が一番印象に残ったのではないかと思う。自分達と同じような年齢で、戦地の中で看護を行っていたこと、しかもあの暗くしめつた壕の中で、重傷の兵士を看護していたと考えると、本当にゾッとした。ひめゆり部隊の一員であった宮城さんの話の中でも「日々働いていく中で人間が人間でなくなってしまう」という言葉。「毎日毎日傷口からウジをとる作業や麻酔なしで手術を行ったり、手足を切断したり」と戦争そのものの悲惨さを学ぶことができた。

また今回の研修旅行でおいしいと思ったこともある。今年沖縄でサミットが行われ、それにともなつて、平和祈念資料館も新しくなったが、その展示の内容を変えてしまおうという問題で、戦争そのものを美化しようとするものであった。泣く赤ん坊をだまらせようと、母親と赤ん坊に銃剣をつきつけている日本兵の姿を、あたかも家族を守っているように銃口を壕の出口に向けている姿に変えられていた。これでは日本軍が行ってきた悲惨な事実や太平洋戦争が侵略戦争であった事実がゆがめられ、事実を事実として伝えられていない。どうして政府は事実をかくそうとするのか、事実を事実として正確に伝え、認めるべきだと思う。

現在、憲法の九条を変えようとする動きがあり、沖縄でもジュゴンのいるきれいな海に新しい大きな米軍基地をつくらうとしている。もし日本の世界にはこれら憲法九条が変えられてしまつたら、あのうまかつたラフテーや

ソーキそばや、テビラやクツカンやハリセンボンやあの三線のリズムを楽しんでやることもできず、皆で夜遅くまで十年物の古酒を飲みあかすこともできなくなってしまう。そして二度と戦争を起してはいけないと思つた気持ちは守られず、再び戦争に向かつてしまう。この研修旅行では、戦争は自分達のすぐ近くの身の周りにあるもの、そして本当に平和でなければ医療も健康に生きるというあたり前のことも成り立たないということを学んだ。政府が事実を事実として認めようとしていない今、事実を認め伝えていくことが自分達の役割ではないかと思う。

(1科4期生 吉田 拓生)



## 2科5期生 韓国研修旅行

私達は「日本の平和と医療を科学し、二十一世紀における日本の看護者としての役割を考える」という目的をもち韓国へ三泊四日の研修旅行に行った。

ビデオ鑑賞や三上校長の講義、事前学習を進め初めは「なぜこんなことをするのだろうか？」という気持ちの中、韓国の歴史・文化・医療を学んでいった。勉強していく過程で、豊臣秀吉の時代から日本と韓国は深い関係にあったのだということを知った。そして、朝鮮人が日本軍により強制連行され、従軍慰安婦にされたり奴隷のように扱われ、殺されたり拷問を受け、多くの人や韓国の国土文化が犠牲となった。日本の文化・歴史を知るだけでなく、世界の事も知らないとは本当の意味で平和と医療について考えることができないと思い、韓国行きを決定した。

韓国へ行き、景福宮・パゴタ公園・西大門刑務所跡地・グリーン病院の見学、元従軍慰安婦であるハルモニ達の住むナムムの家の訪問、韓国大学生との交流をする中でとりわけ印象に残ったのは、ナムムの家の

訪問と独立運動発祥の地であるパゴタ公園での見学だった。

まず、ナムムの家において私達の国の人間がハルモニ達にした事は非人間的で許されない事だ、と強く思った。その日本人である私達が、どんな顔をして会ったらいいいのか、会うことで辛い思いをさせるのではないか。また、私達に会ってくれるのだろうか、とても不安で複雑な気持ちを持ち、戸惑う中訪問した。ハルモニ達が一人また一人と姿を現し、笑顔で迎えてくれる人もいた。そして、私達の体に触れ温かく迎え入れてくれた。私達は、感動と嬉しさで胸が一杯になった。溢れる涙を止められない人もいた。その後の資料館の見学やボランティアの方の話、ビデオから言葉にならない衝撃を受けると共に、日本軍国主義の残酷さ、

天皇のしてきた罪の重さ追及逃れ、日本政府は謝罪するどころか、その事実を消そうとしている事に怒りで一杯になった。

また、パゴタ公園では、『なぜわざわざ見学するのだろうか？そんなに大事な公園なのか。』程度に思っていた。しかし、そこには独立宣言をした壁画や活躍した人達の像が生々しく置かれていた。そして、何百人もの老人が公園を取り囲み、中には独立戦争時の犠牲者が多くいた。私達を冷たい目でじろじろ見詰め、公園内は異様な緊迫感に包まれた。その中、何人かの老人が私達に声をかけてきた。日本語は忘れたといいながら、教育勅語や軍歌等はしつかりとした日本語で話してくれた。当時の朝鮮語を使わせない日本の一方的な教育は五十五年もの月日を経ても忘れられないほど厳しいものであったと感じた。

今、私達ができること、これからしなければいけないこととして歴史に目を向け、戦争があつた時代を忘れずに、歴史を学び伝え、戦争のない平和な時代を築いていかなければならないと思った。そして、平和が守られなければ患者さん主体の医療は出来ないことを学んだ。

(2科5期生 大澤 那智)



## 2000年度教育活動（今後の予定）

	学校行事	1科1年(6期生)	1科2年(5期生)	1科3年(4期生)	2科1年(6期生)	2科2年(5期生)
1月	9日 始業 19～20日 1科Ⅰ期 入学試験	15～2/2日 基礎Ⅲ実習			基礎実習 シンポジウム	
2月	2～3日 2科入学試験		19～21日 地域フィールド	25日看護婦国家 試験		25日看護婦国家 試験
3月	3日 第3回卒業式 6～7日 1科Ⅱ期入学試験 19～4/2日 春期休暇	基礎Ⅲ実習 発表				

## ～ 同窓会 結成 ～

勤医会東葛看護専門学校も開校六年目を迎え、そろそろ同窓会を発足してはの聲が卒業生よりあがりました。そこで各期の代表者が集まり、教職員の手をかりて準備をすすめてきました。十月一日卒業生と在校生代表、教職員の総勢四十九名の参加で同窓会発会総会を開催。会則を審議し決定したところで第一回同窓会総会を開会しました。

この日は東葛祭の日で校内はとてにぎやかでした。卒業生が集うことで、東葛祭の成功に寄与することにもつながると考え、来年度の同窓会総会も東葛祭の日に行うことが決まりました。

同窓会は毎日の医療・看護労働の中でくじけそうになった時、お互いに励まし合うそんな仲間が集いの拠点にしていきたいと思えます。

そして勤医会東葛看護専門学校の発展を期待し、応援していきます。

（同窓会会長 加藤 弥生）



## 編集後記

年の瀬も間近になりミレニアムと騒がれた二〇〇〇年も残すところあと僅かです。十二月始め県下看護学生研究発表会があり1科「重度の障害をかかえながら自宅で生き生きと暮らす〇氏から学んだこと」2科「重度の疾患を持ちながら頑張って成長している笑顔が可愛いK君から学んだこと」を報告しました。両報告とも質問がたくさん出され、近くの席にいた他看護学校の教務の方が「よくやってるわね。あそこまでは出来ないわね」と話していたとのこと。参加した当校の学生たちも自信を深めたようです。これも一重に患者さんや地域の方々、実習場の皆さんのご指導・ご協力があったからこそです。

十一月末、韓国研修旅行でお世話になった朴先生が当校を訪れました。

朴先生は「各々の民族の良いものを受け継いで前向きに交流して行ってほしい。日本国憲法は世界に誇れるもの」など話され、思いでに残る一時でした。世界に誇る平和憲法を、二十一世紀に引き継いでいきたいものです。

学校通信編集委員会

江島典子、二瓶幸江、小澤清子